帝鑑圖説

四

自七巻至八巻

内閣文庫

番號	和 36295	
冊數	6	(4)
函號	子253	10

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

帝鑑圖説巻第七目録

論字知諫　唐乃穆宗
屏書政要　唐乃宣宗
焚香讀疏　唐の宣宗
敬受母教　宋乃太祖
解裘賜將　宋乃太祖
碎七寶器　宋の太祖
受言書屏　宋乃太祖
戒主衣翠　宋乃太祖
親自觀書　宋の太祖

引衣容直

宋乃太祖

帝鑑圖説巻第七

論字知諫

唐乃穆宗皇帝とてみかど一人おはしけりはなはだ
文字をこのみ書をよみのまゝ豊かなりしかば臣に柳公權
とて一人のしんかありよく字をかくことならび
なしある時穆宗柳公權がかくところの文字を見給ひ
らんありて則ちとて筆をとりて書き給ひなんじが
筆はいかに文字をいかんとしてかくのごとくにみごとに
かけるぞと仰ければ公權こたへていはく されど文字をかく
ことハまづ心をたゞしくするぞ 筆をとりちからをいるゝは
まづ心乃うちにありてせいいとのみすべし

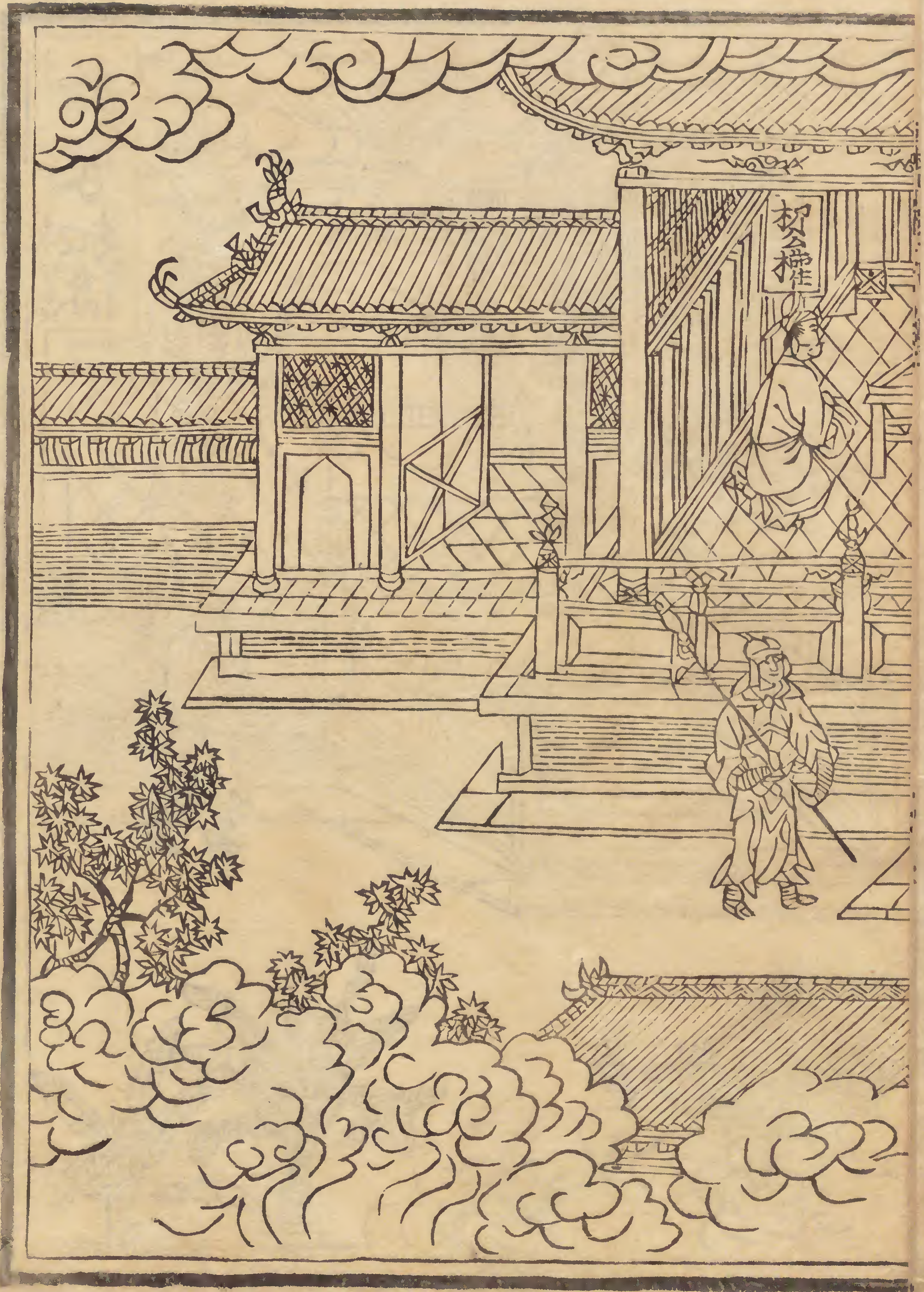
よき法なるあらかじめはれどかくところの筆法(ひつぱう)いかの
何かまでもちひ後よとし法あるところも筆法
なるのばかりおしもとうくゆかしげなるハあとゞりゃ
みちえたりあことに公権(こうけん)も賢人(けんじん)あり穆宗(ぼくそう)皇帝の
ひ何ならをとハ後ふによりて人(にん)こころへ気乃ここでもさ
ふかうとやしかるハそれみこれぞいをいさめてこそ
もうせんがなかとうやうやくされをあんだれで
筆法まうざ法をうしぞよかろび何かからしてひとまでさ
とれでそのあらた事をこでしうぞとゞいふ事称し
いちんやてんうの君たる人もだんこん乃みちをと
ありなりとまでしうける時も國家(こくか)れまつり

おとこゞりみしかよろ何その王をえだりしぞいう
これ公権(こうけん)が筆法(ひつぱう)をよ何く知この心をいさめぬまで
穆宗(ぼくそう)もやくその王をさとすまりしくて何ほどものを
此後りとうちをひそめたる後をはぐしみそれ
王とおもくかんじ後へうそしよく公権がまことを
りちあてひをこぐもう書まりで法もとより明王(めいわう)
あうん事やしふかきよでけうとうや

論字知諫
唐穆宗

屏書政要

唐の宣宗皇帝と申すみかど一人御しますとぐよろづ先
祖乃いましめにまかせて天下をおさめん事のま
ことも先祖乃みちをまもりけむとおぼしめしけるに前代の
太宗皇帝れはくらゐにおはしまし一巻の書を金鏡録とや
いふありよつて宣宗其の金鏡録の書をとり翰林学
士乃官令狐綯といふものに其の書をよませさせけるを
まうしてよませてきこしめされけるとなりける
あの書のかんどんにいはく乱未嘗不任不肖治未嘗
不任忠賢といふくのあるくのかんりんありそもくは
きんのうつりしがいはしめいて御近あるのき



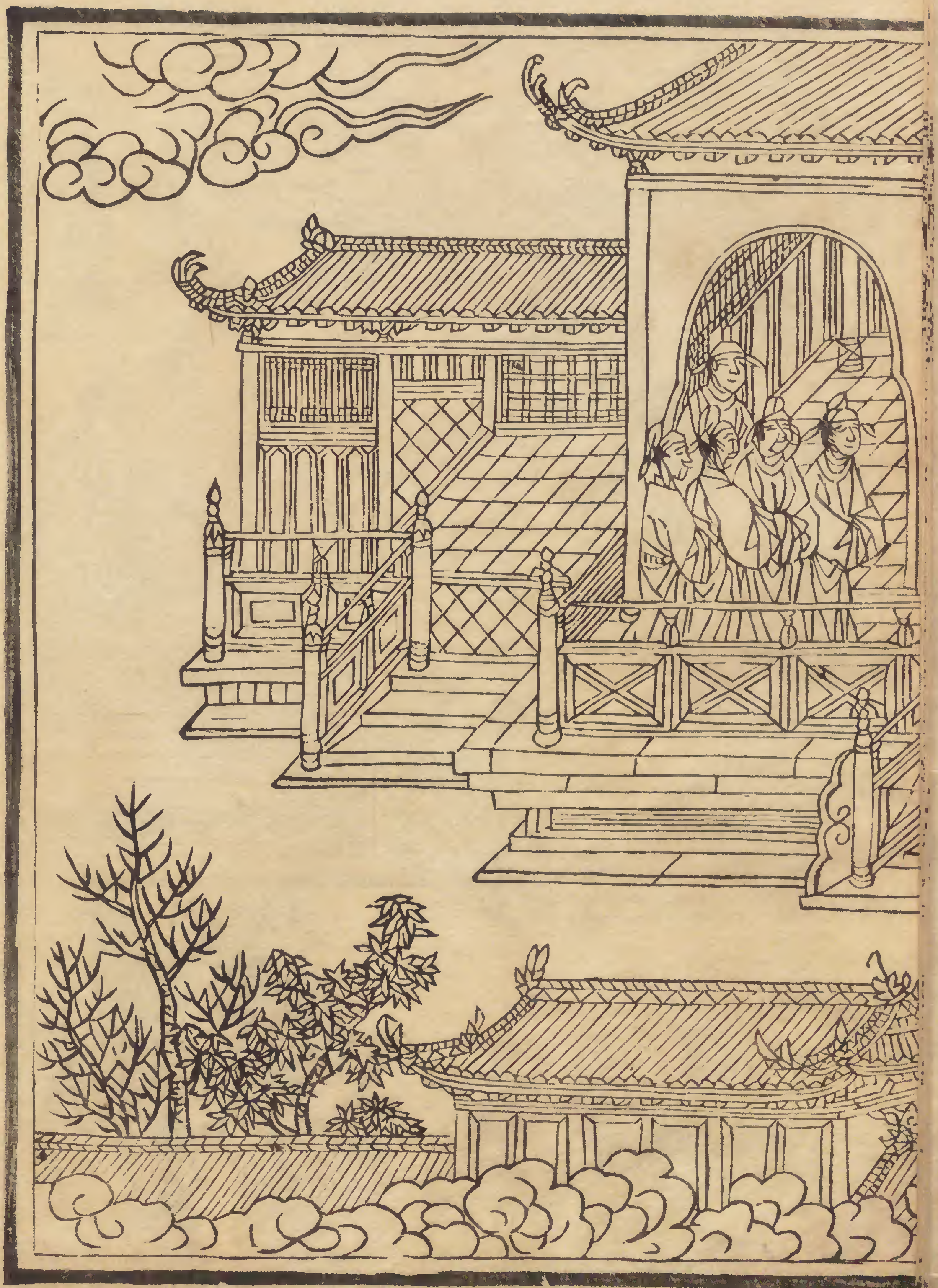
おさまりあらひハみだるく事あれそのしんかの
ぎんあくうしよの進退臣下ハおのくしたがふあれバ
其君なをかひがしろにし我がまゝの道をおこ
なひ國のあくじをかくしなされたるためにまがりたるを
なせうなる乃しんかなるをもちゐなどでてんかゆがみに
みだれて太平ならざる事あるなりとぞ又しんかの心
ちうせつにしてよくそのみちをおこなひあしく
表諫うやまひて國乃ためにさいりひをかくしまじ諫
めぐむおこなひ諫かなふ乃しんかをもちゐ用ひて
天下をのをきハ太平なる事なんのきさいの乃あるう
おこそや宣宗のころをさかしめされてあつくうれ

望をうんとよろこびおほしくて志たがふをよろこぶを
やくめさ勝あひしゆゑとゝろとゝえ
なるよそ天下のことゝまかる人ゑ家を太平にをさめんなる
を継がひまうりゆうなの書にのせらるゝ於一臣下を
えらぶだしそのの臣下おくくゑりせぢりうぞ
とどくきうなけて二政をばくだうしまど又それ臣下
ぜんくゑかうば利ちうびにうやまひて天下の事を
まつりごとだしおうらくてんか太平ならん事ぞ
とろうなるとやら又貞観政要とてぞ一かんの書あり
そもく此書とゝりぞ先代の太宗皇帝の時魏徴と
いひし忠臣のにしんに天下のまつりごとをきぐひよ

ひようろんし給ひあてんかをおさめ給ひしその
しふくとりきしるしある書なれどもことさら
これを屏風にかきつけ給ひあけくれ此びやうぶ
おもよりこれをはなしまをとゞめて一こゑをよみ
給ひていつも政の天下をおさめん事いつもし先祖の
ことくありしと思しめされ　きうとあり

焚香讀疏

唐乃宣宗皇帝は徳ありてまつりごとをとげまして天下を
太平におさめ給ひたりける事のみ誠おもんじめしたん
かのいさめをこのみ給ひて人によろこびおほしませり
故にいさめたれ官位をあたへ賞給ひてまつりごとを
まつりひとのあしきをあれどそれよしかくと
いさめそり又皆給宴中乃ことをさるめたまのく
もし君のせんじによろづれ事をおもはいざ
され給ふとみられよき事誠で御世乃おとくさう
らひもしそのあしきせんじをたてのこへかくとそう
めんして御世乃まくにおるがいそこれ御事しを



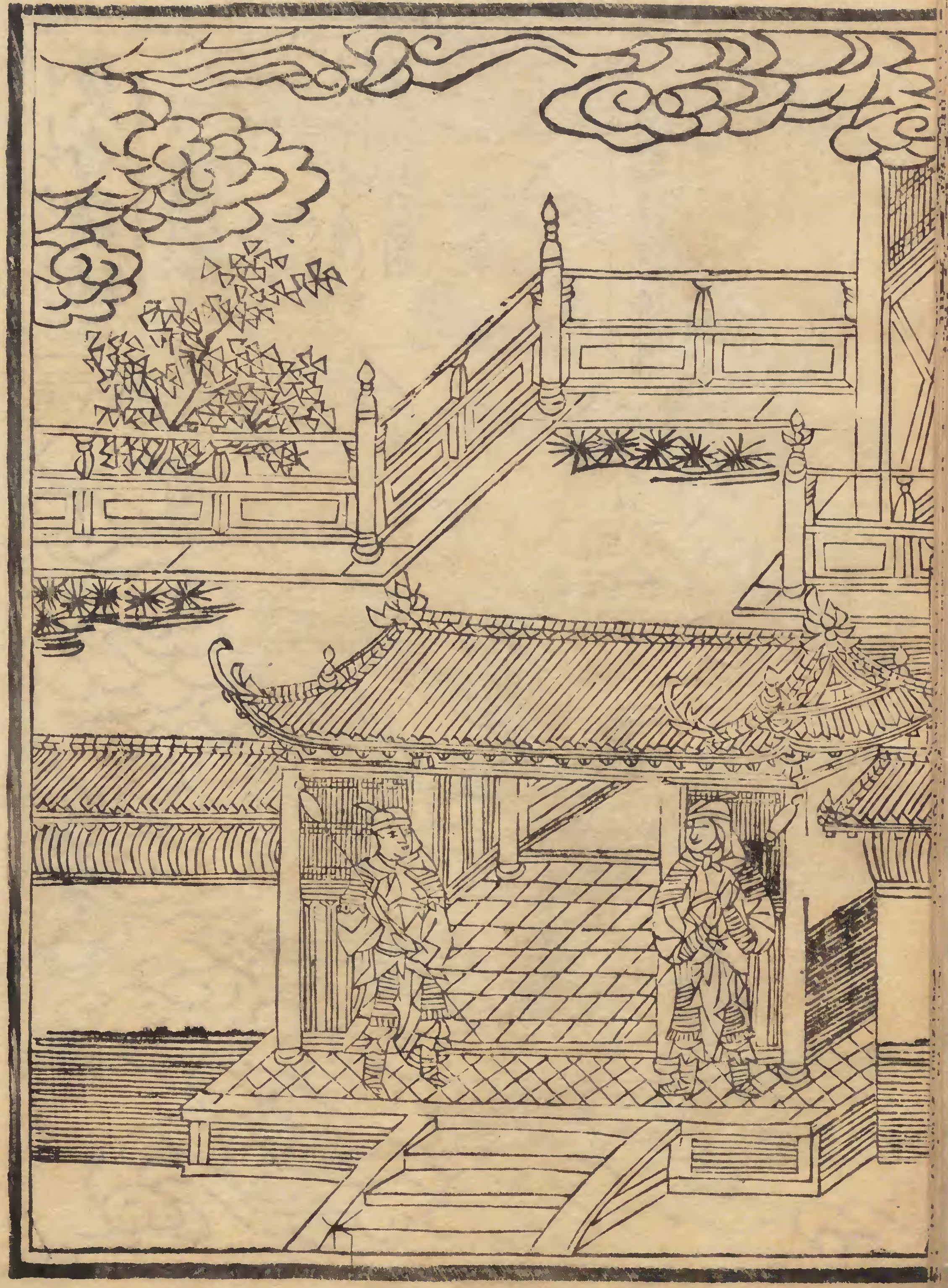
宣宗(せんそう)はよろづの事をつゝしみしんかはいさめ
にしたがひ給ひてまつりごとには事ありその
かの太宗(たいそう)ころもの君をいさめんそれために章疏(しやうそ)を
うへなさてまゐりまで宣宗ぎよかん乃あまりつしや
香(かう)をたきてをあらひうがひをつゝしみあそひて
かの章疏城よりたてまつりそれ天下のあまたの人忠言(ちうげん)を
おさめひねまでしんかのいさめよきるがいどしん
かのいさめにしたがひてをきゝおどろきしやうして
たてふみぞ数くるありしされど宣宗官常も
いさめをきく事をたのしみ給ひてよろづ下に
しりさげひ給ふ又大臣の章疏をもとくありくうやまひ

御しまする事なことありされた大臣もその心ろあた
らうしてはゝ官人乃心づかひよあらせまして
はたしきをもちあれて章疏(しやうそ)をうやまひまふの
ならぞそのまれせんあくをまもちせんなぞとうち
なぞもりまつりおくをたこゝひあ天下城おさめん
ことのみをかゝげあされ君なりとぞ

焚香讀疏
唐宣宗

敬愛母教

宋乃太祖皇帝はじめて御くらゐにそなはり給ふ其
比もくれぞ南那夫人と申けるは御はゝなり太祖皇帝乃
くらゐにそなはり給ふ事めでたう思ふ御様とて
いづれも諸官人ことごとくさんぎはいたしけることを
此ほひたてまつり御悦ありやと人申ども母乃南那夫
人さのみよろこばれずうれはしきていへり母
比よろこびもなしまさに左右にちんざうの臣下
あらためよしを見てよりもこそふしんなる御事とて
諸ともにあげまうすいかにきこしめされ候へ我く
はうへうけたまはるそれ人のおやたるものそその



みだりてよろこびとせりこれ太祖ハ天子より
南郡ハ天子乃御ちくうりかくろめでたき事ハ
いづれまうられりしまさるつゝみさえなくしていかん
ぞやかようのひきまし彼さで御事ある人をじくも
ふ志んありて南郡このよしきこしめされて刑罰おかせ
給ひおろそこにげりうこ志ん乃ひおさし事を
こゝくにみちうる事ハありぐるしといへりされ天子
まつりのハその身をだんこん乃うへよおさに仁義れ
みちをおこなへどもげんこん君をうやまへ里志きは
時を国おさまり天子れ身をうるとうしおふせうを
もしみ天下をおさむるに武一ぶうようをさだとして

あくじをばほよたくみなぞげんこん君をせうしと
はく道をくとてきをせずしくゆるせ志仰ぞおし
あるをいあめあんぞろにと我がみを天子よりとへ
いゑども其れころをたゞいゝ事海ことみ光やむ
かうそとありふよはけてなのはうあう給によの
こぶみねうじやう席ふれれ給ひし御事れ
陛下みはげ給ふのきなうぞ太祖をいましあ給ひん
とのみあとれをや刀ことにくり役よ太祖も母乃御せ
をきこしめされてあとりありとおりめしされ
たちそくうへをもへちへしてもく乃をしたにそひ
うじやおかしやせるおとりあれさてをれよりも

太祖宣帝はあけくれてんかをおさめん事のミを
れおもひ給ひければおしてよくきんをえてひざう流
さりみちをおもんじ儒者をえらびていさめを
ゆかりをにしあてんうの命をめぐミ給へり故に
天下四海あんらくにして国ふらんおさかりなり

鮮魚羹湯將

宋の太祖宣帝の御時にまづ蜀の國をやぶりてさ
がうしやうせしめんとてかへらせんとおぼしめし王全斌と
いふものを大将となされけるしかるに此へ
はつハ全斌にこれをかきをもつて数万騎を
ひきゐしてちよくをうけてすゝむところにおりふし
冬の事なれば雪霜おびたゞしく寒風つよく
ふきしけりければ兵どもまでも大雪のためにむさぼ
ほどにかゝりけるおりふし太祖宣帝は講武殿に
みゆきなされて御かぜをとゞめさせおはしまして
なをうちみて紫貂のきぬとろもぬきかけさせ

紫舘乃かうしとちやくしてかんきみをふせぎ給ひ
きりきうなよみかどだ右うしきんだうろきんり
ふむかいて此れせろうゆきまれいかし御らう紫
舘のかそこ給をときてかんぶうをふせくとい色々
てんちきうふかんじけくけむさいよくおうり
とふ事おくをとけくおんまうよきよく此国へくぐ
王乃家をまんみん乃ほど々のどもあけられきをな
いくさきゆきをさのいぞてかんきをげしも多うり
とふ里けむさまり給りおうまじきさ何ろぐあれな
とくらんとそ此多うしき給ひしかそお給をえて
紫舘のかうしまそねがひ給ひてそれより蜀へ

ろうじ全鐡はおもく給りんとそてる城をやめくいう
うをとしたりまそれかうをまんざ乃はそそのり
せんじをそざしとしひろうそきそをられく
此義おかんぶうに多をとまり世寒気よむをいさいう
多さぞやかんなんなうらんと打もハざらうハおう
孫どもうへしむろもにう給りおうをまんりん乃そその
其人のくま打くかそこう給をれ一おきへこくえおりへ
どもそのかぞおかさ事多ねだいかん吃しても
かなふべしきくじけうかう給れうらをおりひ
御りてえさ訪よとの給ひしきとれともへむりしが
いとみいて海までさめしなに阿呆あり全鐡君より

さくら殿たまふかくて御終をなさるゝうちおほうとゝそ
まゐりかくれ御あんなさうんへしりく出かえもなんだ
なるがしそりそのかりもまんみん乃はたとのとも
君乃おほせとうけたまはりそしけるに御帯乃糸
ぜひよはれあんなかりぜんとてまれもくといさゝ
まうひふちうう誠あくせりくあくなせんどくまゝ
うひぬ連ぞさうなくてきをかろがしさのく此国を
尽いぢしてうやらたようたのがまゝりこれとやも
太祖乃きひれあく終あり終人ありもまんきうれも
このともいの川まもいのちをうちりえぜさうなく歎
なきさうんへまきれてんうの君さう人さんかの紅を

あんどりくつ孫うりあんしやう城ゆきこうし武き
りぐさんりもあく終とえげ後しみゝ城うやまひ
なそまうりてあくぜゆさうそり行らん事やしき
さうう那のとうや

解衣賜將

砕七宝器

宋の太祖皇帝蜀の国をあへぢして蜀の主孟昶を
めされてはじめてげんざん（見参）し給ひける孟昶
あまりさいはひしなかりけり金銀七宝をちりばめて溺
器をはらりたるを知りふところよりうばひとり太祖これを
御覧じておほかさはおどろきあきれてただ行にちん
ぢりのものをば御つけにつけられしかの溺器を
くだき捨てられけり（?）とれ太祖仰せられけるは七宝を
是ものにたとへたる物にあらんじ是をもって
飲器をはくず宋花もあやしからん也となんじ
亡ぼされをりち蜀の国へうつりなぞいよいよくみも

まことのみはくいろかうるをとりすてたくんはう
みちつまあるりあれどもおりちあれとうちくだき
それ国家をおさむるもの宗廟に地ご事あまた
国にわざはひいできたりいかなるぞかなしなり
それ太祖皇帝ハ宋乃天下をはじめてまづ一だん乃
君なれども後ゝまでずいぶん子孫乃ためを
おぼしめしぜいたくをこらふるを世はふるまひとり
すること心え乃り

受言書屏

宋の太祖皇帝のとき王昭素といふものがくもん
ひろく名をとりて天下にきこゆるものは以前太祖
ら達す事かなしまるよりも志深し召されけり初
昭素をよびいだし国子博士の官になされて
おもき所をとい給ふ此時昭素がよはひ七十余
さいなりしかば太祖昭素たちをよくみ給ひ
皆されけり易の乾の卦をよみ世をへり御前に講じ
天よりあたへしふりいをかりて昭素申しけるはこれ
天下の君命をくだされしやうなりとていふより乃
事をひいてよくいましめしやうあをとして君を

いさめ申さんとのおほせ給ひけれうち乃一人たゞ太祖
御かたへさとし給ひてはよろこびおぼしくて趙普
なごろせさひろうも我が力をたんごめし給さそ又
てんかをあらそひ給ふさめん事のだう里なきいうぐ
せんとおもしめし趙普こたへて申けるハそれ
天下をおさむるにはたゞ義をはめぐむにしくはなし
それ又君が身をおさむるハよくをさるに志くはなし
御しそれ義とハ国乃りとうをかさとれて国
いよ／＼あんらくなり後よ国をおさむるハよき守ご
民をあいするよりよく猿なそ亡身のおこなり
よく／＼ゟ忘はたお身やもし世ゟ御うに申あげたてまつらば

太祖ゝきこしめしてかのめかうぞふかゞりしめし正風
ちかく趙普が申あげしをとれたゞまことなれどもせ
給ひて屏風にあらハれをかくせ給ひてはなしく御読
なされたりそれいふしへをはさへさくう天下乃おさ
さ後らけ事ハ君乃おほく給よく事おこないぐさを
あのまゝ禁なふゆへぜんごんあれをまなびけりされ
ばくとよくをあしくのをそれをうぞひやる故なり
国みだれて其君くらゐをうしなへりおほく試ゆる
あんぜうに天下れ君をするさんてかならぞ身をを
おさむみのひあんらくなれど君もゆくかふ
まし後せり

奏文言書屏

戒主衣翠

宋乃太祖皇帝のむすめに永寧公主と申せしあり
ある時公主翠鳥乃羽にてかざりたる鋪翠と申衣裳を
めされて太祖にまみえられしかば太祖公
主乃めしたる鋪翠のいしやう乃あまりなるを御
らんじてあらくきうをせ給ひそれより公主にむ
かひて仰せけるはなんじがきるいしやうをぬぎ
ミ川うふえさ拵よまふうりして以後かく而衣
裳のたぐひなかりなるはきるべからずとかたくいましめ
給ひしかば公主きもうそされて終身仰せたる旨を
まもられその衣裳さりどくつともはなうけるになん

ぞやうくの娘ひろうぞ太祖おゐ娘なりくへなれし
一人この衣裳をきて宮中のきはにどよきとよぶも
みよぞけりろうを見ろをみまゐりまゐぶ為し
さわんと見もこゝのうら翠鳥乃羽なりうわさひ
きぶめくたうしあ為しぞんこんこれなを見ろあうぞ
そ見なさうらんがそのこめよ翠鳥をとらん事ほれ
あとらじとはこうまて数万乃翠鳥むなしさんる人
あんじ一人がぬきとやうがありなんじことし長久よ
きくふりきなうんるを禄ぞりぐかくるあくぎるう
なさるとたりしぞくゞ身れはいをひなすらん事とはよ
くうて孫よ孫が一為しとうく次孫ひ名れぞ公主

太祖乃おほせまん侮しますていはせ見てく侮ことそり
しおきれ猶ひりくおれ猶がふりたあやまりとそ父乃
仰せよきくさうむ猶ふされたりすし人のひもく宮
中にうこをあらゆふ事しとらのあと天下おれを
まゐひりくたうたる一夫あり又宮中ふいしやう乃
そて袂ながくなれぞてんうまゐびて一匹のきぬを
うりくせ用いちこれを袖とせうとうこ袂まゐふきを
うれぞそれうこうろ為さ人ハよろびりよ清おそりく
きむ為し天下れ衣をきいうとなあのめぞばんこん
たゝうをつ井為してうこ袂まゐぞぬものもあり
されぞ太祖宮帝の翠鳥なさう禄む事なあくれこ

縁ふのミなりぞこれぜんこん乃たねなり

竟日観書

宋の太宗皇帝とてみかど一人おはしまししはふかくがくもんをこのませ給ひてはさうのこくよりゆふぐれ申の時までも御よせ給ふ事なんしもおこたりましまさずあるときあまりに書物をえいらんましくて臣下の儒者に仰付させ給ひ今までいくいにしへよりいまにいたるまで天下の王あるひとのよろづのまつりごとをおこなひをきしをあつめて類一門の書とあつめしかどをやしせぞ一千巻につゞけて太平御覧といへりけるに太宗この書を毎日三巻づゝよみ給へりあるとき宋琪とて一人の臣下あり

こゝみへそうりんやしまゐらハまい月ゟなうに書物を
ぎらんなされ諸儒に命じ集よせん類
わけしてかれ読ゆへうし申せしかバ太宗仰せ
あらためてハむかしがたりみなまで天下乃王の
おこなひをのこらず此書にしるし置く数千
書をひらくよむなら学人の智をあさらうかにして
いよく智恵とまし給ひ我此理をおりひぬまで
毎日あれをよむといへどもむよまく〓のしめべ
ゆうふ川がおく〓十八句し一年がうちみな〓あの
太平御覧千巻の書をよみてんなるをおぼえねまで
毎月三巻づゝよみし事をおこ〓る事

あしやあり殊ろうこうしとりうありて皇書又經乃
うちにおふそその理れさとしがたきをば呂文仲よ
といひりて文字乃ひゝんをすぞ王著といひし者
にといひて字れよのごがさきとゞろをぞ葛湍うしとい
たゞ為りはうくあんぜられそれ聖人ハむまよ
なうら年とく月あさらうかりといふ色ぞ博務り学問
をはとめざれば其道に通しがたしとむりしと
おいて海まで天下乃おさまりし事又うてうし
事なうび川てんかの理り物毎くなひろき書物を
みくまおなぜんぞようがさしうくとん博學
はとめねまで天地乃理をあき穏りしさとりさうに

候よし事を訓しされ太宗皇帝もあげられがく
もんをこたらざるようげましあふゆへ天下太平に
をさまりしかば末代いたるまでがくもんさかん
なりけりこれ又この君よりはじまり

引衣容直

宋の太宗皇帝のとき寇準と申して一人の忠臣あり
あり直学士乃官になされ後はさいしやうにいたるまでいま
奏せしひだりかなが極人に寇準もちうせいはげしく
気みじかにしてつねにいさめをまうす寇準は人に
志かうしてあらく君をいさめ志かば太宗なのよ
どう腹立ちしめしおたちなされましくて御座
をひかせ寇準ひかへ宮中へいり給ふ寇準はその
みたよりもはなれつち御衣のたもとをひきとめて
との御座にかへしまつりてのちいさめ
誠やせしかば太宗ぜひなくその事をはやく

せいかうしめされてより寇準がいさむることを給ひ
ともありせはりしめしけれよろこびおほしくて朕
ことかなせきうたうハまた寇準をえてこれをしんかとせ
しハ事むかし唐乃文皇の魏徴をしんかとせられしにひ
としかるへしとかくれ給ひしことのたまひけれハ
みなひとへにかりけれハ人乃しんかとして君より
ちう信をかうむるともかたよろこびことをいさむ為し
君をしたしんかのいさめをとりちかぎんを陛下を君は
うやまけれどいま太宗皇帝も寇準かいさめをもちいる
一にんいうらをたのしへどもいつかいまたしんかになさ
じひとたびて寇準をとうやまひ候しまを事君臣乃

みちあきらかなりかなかゆへに陛下も又よく朕が
いさめをほしくしあてんかのまつりごとをきかれ
むるべきやまことしてまいあの事やもおうかする
とかや

帝鑑図説巻第七終

引衣容直
宋太宗
寇準

帝鑑圖説巻第八目録

段宮聴諫　宋の仁宗
受無逸圖　宋れ仁宗
不貴珠飾　宋乃仁宗
納諫遣女　宋の仁宗
天章召見　宋れ仁宗
夜止焼羊　宋乃仁宗
後苑観麥　宋の仁宗
軫念流民　宋れ神宗
燭送詞臣　宋乃神宗

帝鑑圖說巻第八

殿宮聽講

宋の仁宗帝とてみかど一人おはしましける御ま
宰相王曽とて一人の臣下ありふかくしたしく語り
をりひまおはしまさばおほみこゝろをしづめて後世よそおもひ
弘ふ旅人いかんともして儒者をちかづけ君にかく
きんなをまうしめて聖人乃みちをおとくおひ天下は太平
みなをさめ給はりん事のたちはからひあらんと見えへ
申乃家ハあられ故にて崇政殿へみゆきなりされて
孫奭馮元は二人乃儒者をめされて論語をよませて
きこしめされかしこまりもてめでたくきこえまつり

しかるに仁宗皇よりしておぼしめし則枝二人乃儒者を
召されてはじめて毎日おこなはるる書物をよませ給ひて
きかしめしまた後におりおり二人をめさ
れてそのむかしの世をおさめ給ひたりし仁宗きかしめ
され給ふとえあるひは[illegible]まさやうぎ
きよしめされ給ひて魏徴をおほめおもひたるみて
是れあり給ふてしうろうぜしなし書物よみそざされ
たまひてこれによりて御ち遊ばれまいらせ給ふ
うりしを集めてよむ事なし仁宗魏徴がぞう
つかふるをもってはやらんじてさらまちたるを
ひのうへ給ひ魏徴をおそれかやうざとうく

あらためてちやうきんせさせ給ひたりされども仁宗
皇帝もそのはかりごとくさあり給ひて賢人乃金鏡
あつめあつくりんをすすめ給てまつり又魏徴馮元か
やうやうあつてまいきの道をおこしてはよう
書物をよみきかりしが仁宗れうたがひもふしてに
義理ないし忠恕のみちをおこなひて末代まで
名をとげ賢君といはれ給ふ事ひとへにかかるとうや

陂容馳濤

受無逸圖

宋乃仁宗皇帝ハとき學士の孫奭といふもの
あり毎日講讀閣にまうして君ハ讀まゐらせん
ありしいにしへ乃帝王ハあつひて天下を太平にをさめ
又ハ天下をみだりして國家乃ほろびし事どもを
くりかへし〳〵解きあかしよみきかせまゐらせけり又無逸
乃篇とて一冊の書物ありけるがかの書ハうち
にいましめハ帝王乃てんかのまつりごとをば
とめて又だんらんにあそれミあふ事なきをつぶさに
あらはし述しつ孫奭この書ハうちかへしゑがきなを
うつさせばくりてこれをば無逸乃圖と名づけ仁宗へ

よろめそまつりに宗廟よかんましくて濤瀆周
乃うらよあらて毗易とをけさ被あひりく毎月御說
なされ久りちはあつらふ遁莫周延義周とて二川の
周を清くら被給ひて蔡襄と申もの尓ちよくめん
ありてうの無逸乃篇と毗二周乃屏風よりくせたまさ
絶りか御うにおされ久る事ありまつ孫ありしあれを流
らんして天下を於さめ治しますゆれその以下
志め乃多めとうやそもくあの無逸乃書と申ハ
むかし周公旦の成王をいましめくはくうせ給ふ書
那ゑとうやされでこの書れあう給ハまりてんかれ
為めに肩性春たる為し秋於さむる乃みちをあらし

よろそんかのまつりおこれはゆと悦をたまさ事乃
理を成王に志うしめ給よるべき天下のためにおあそん
は祈りおさされ清くしてあへてゆうりをれせぬう
と泡ちれの川うさいきひをえそうあをたりち
給ひまとる為ことに長久なうつ事あり帝ろそうれ
志るまつぐ壽命をの清うこじう延して位
をたもちいひ給ふためしいうのへ商乃中宗宣帝高宗宣帝
祖甲乃おごく又周の太王文王れおごくよく政道を
おさめ給ひてまつりおこを志ずふ為し又殷乃
紂王乃ごとくおくドを刻しぶさう淫たくみ給ふ
為うぜとて事うくいましめ給ひたりそのおくれ

その時さうざう事ゆゑとも万世よりいまゝで
てんかのまつりことをもかゞみとすべき事ぞかし
故に仁宗も孫奭がはくし無逸乃図を絵かゝせて御座
蔡襄にちよくめいなされて屏風にうつされをかせ
給ひて我がいましめとし給へりされどもこの無逸乃
書はいましめとりて天下をおさめ給ふの明なりなど
に示す事あるべからざらん

求寶珠餝

宋乃仁宗皇帝乃時宮中乃きさきたち玉をもちゆく
りうこ乃うぢりをおそれ乃ほ進おやらどとかせ
かむ股よこやこのうち玉乃うちとういうちぢ見あり
仁宗帝よりしとをうめしはちて後小出りし出されけ
きうハ宮中乃きさきども玉をもりてかけりともろ
事毎ちまち見とやでめぜんだ天下ばんこんう
いてるまでもれおとうじやまるぶ為しいかん
やもしてものもをやぐむ為しとおかりめしあう時
為つでんにこれら揆ひてゆふらんおされなる所
みりろくろきさ見あちこみくれまへりちん

たり給へり然してうあひなされける張貴妃の事
御あはれみされけれは歳へいでては世給ふがよにめづら
しきたましひをもちてうつくしかざり給ひけり見るひと
おのこもおもにむまとだもおよばれず仁宗帝より
御寵愛して襃衣のたもとをさゝしかげし張貴妃の法ず
なきも二月とも見事なりし則作せらる御事ハなんじ
さらがかうをれていをよくみればさいをひけり
あつさしてあれわざさひのまがさありけれその
かきり球とり勿そやうしにありしかゞし張貴妃ふ
ふたつめうしをおもしめしあはちはまへなあらさ
つゝてかうなれかざりをとり給ひて御つのかけりを

なされけく又はまへにまいられけり仁宗帝のよし
はらんじてはよろこびましはせうこれよりして交
中の宮はれちたち仁宗これをも世給ふをみれてりをも
二ふびかけらをの六箇殺りしらやうのうち実の
何ことひやをうりきほうしくおもんされたをまねた
うれをものまれどもようんへさる者あまきりなりと
きてへ自分をものくあろもふ所らぞもの不附んける
ばらに勿ぞれ五穀をつ世給ひてあきらの玉をうい
あけあ附のしやうやんとなを事いきそめてなんの
勿作提領し放よ明君あ穀をかりく勿れよんで
あといふみを給ふ事あとゝりせつうふえなり

国立公文書館
National Archives of Japan

納諫遣女

宋の仁宗皇帝ハたゞ一人のしんかより王徳用と
いふものありしがこのあり様によりて送別乃贐
とゆかしかるに徳用あつとえらびよき女房を二人
もとめて仁宗へまゐらせてまづ仁宗この二人の
女房を御らんじてはよろこびありけるをなし
しかりとおもひ人ともなく宮中にとゞめおかる
事なりこれ仁宗乃あやまりなりと王素といふ
しんかありしかのこともいさめ申きみへそうもん
申けるハ此二人乃女房を宮中よりとゞめ給ふべき
うちきぬあたへ給ふ二人はりのほかへ出り

とゝもとくら堺へうしと志きりにもとめて
まつり仁宗よつて作せらるゝ良達をえられ真宗
皇帝乃子ありなんじこれ宰相王旦が子なり
志かるになんじが父王旦を律にしておちく真宗を
いさめてまつらずひいりしんしん乃みちあきらかなり
志かるにこれハよれとあんじて代々にれたのしみあり
あれよのはしれ陛下とおあじりきしらばよれ
あんじに志さいをかくさんとこの二人乃女薛を
王徳用がよれはもとむるところありしかるをつげ
うち聞やまりて宮中にめでおきさつ孫はだ右より
らんなりしをとこ又此二人乃をんなをいかんとしてか

宮中をいづるを見てぞと仰せらる王素もかのよしきく
よりさうけ給てやしあげ乃ふたとなことを以二人の
ものを律にだ右よおりしめて宮中をいづし給ん
ぼんをあれ我が身うけ達いなりその様へいかん
とまにこの二人乃女資律よ是れ清そとふあり波
しかばかりもおれうく孫をせよりしせいとくを
うり波もべしよれあのゆへ我そんじて志きりに
かくすやしろり仁宗此事をきくよきありとおほ
めし我があやまりをさとりて志なりち官人を
めしよくめいありてかの二人のをんなども我宮中を
いださ錦給ふ王素此ようしをみなるまりを又仁宗より

中ろうにおきまでに御かいさめをきこしめし
いさめよしとおぼしめし事ごとにあはれみさ
かうぞしつらば君まゐ文中へ入せ給のくはん
しばかふせ二人の名をいださせ給たまへかし給んそ
みえうり　かくまでしもいさはせのふとりせし
うなる仁宗御せまうりへ入まゐ宮中にいりなで万り
一切を御のどもにかごり給あしみ我がまつ給を
そろされてまゐらせし　かくさう御名しでをみ
御らりいさせよとある数ろうことゝりなり
いまのご御もうりさぬまに宮人きてゐてをうりんを
もちゐ二人乃そのども文中をはちいだし東門より

きりぬとやし　せし　かくしおくうり挙のく仁宗も鈎含を
ありぞけて宮中にいりのふされ人乃君として志ん
かのいさめをきゝたせ給ふ事ハ女色てうあひ乃
事のこなり給うふに仁宗皇帝も二人乃女房を文
中にとめ給ひて御寵り給まへにちん御ろりしるのを
主家がいさめよしとてさげて二てうびまゐをとりへりたえ
昔よりど文中をいだささ務給ふ事あれ数いとくの
あるべきなり

納諫遣女

天章召見

宋の仁宗皇帝ある時天章閣へみゆきなされて
すなはち閣下に諸臣御史中丞以上をめされ仰けるは
みかどはかりごとをめぐらしおもひてきんうちにせ政
務ハそれ天下のまつりごとにあらそでんちうしも
ため事何らのさみ座かなひにまする上へそう
もん申候とそうこ史練を仕あらる人々申しけり此時
翰林学士張方平と申者おつのりさためをうけたて
まつへそうりん申しまりり君このよしを聞召て
よろこびあり此おりしめしあくあどろき感じ
まりて明日さうてうのにうつほうぞとめり仕あそ

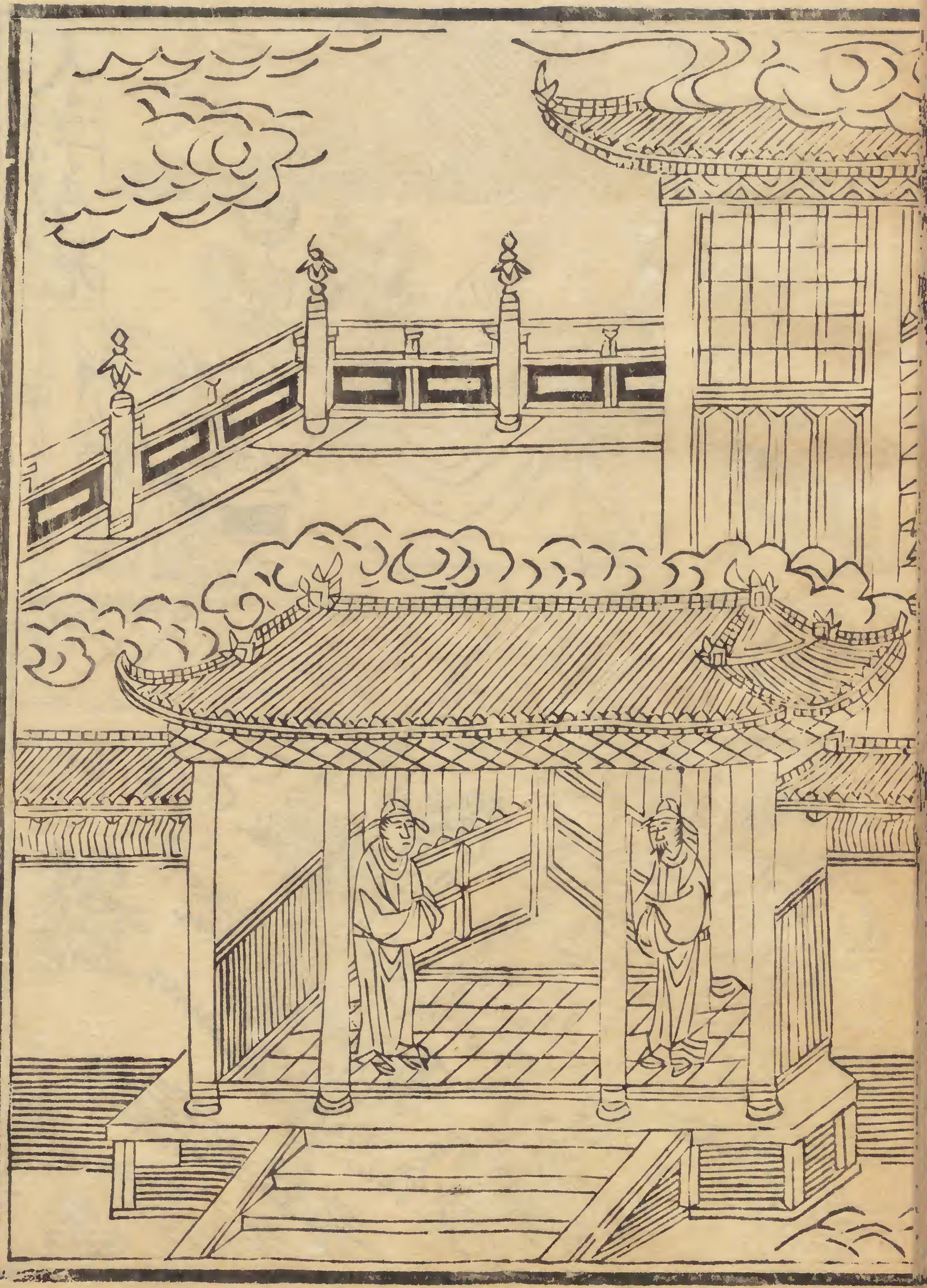
だし給ひてきのふれ御璽をうけたまはりしざうらうの
あらだまふ乃あはせをうけたまはりきみ承りけり
きこりていさめ申せる事と仰せありしかのと紀侍御史
和郡といふものかりたれいちぞうもんやありん
験林鴻臚内外射文乃諫院下どもいさより以後君れ陛
あにおやまりありたるみなみはけしきにつけありく
いさめ状なさんと紀御ゆるしあり海さんぞ残もく
と忠言をつらうてかならず君をいさむ故し仁宗帝
よしさうしめあとりりありと物がりしめし此よろ
あびをつくりともなしそれに仁宗皇帝も天下をおさ
めんるりのこふかをはくし給ふゆへ諫院下どもなを

めしいつしいさめをする事と仰せありける張方平
まで乃仰せにまつ陳りくいさめをなしそれまり小
仁宗よくいさめをきゝてさがひ御しますも核へ天下太平
ふおさまる御事中ともとまつりありけるとや

天章召見
てん しやうにて めされ けんぶん
宋仁宗
張去華

夜止燒羊

宋の仁宗皇帝ある日のあさ近侍に臣下にむかいて
仰せありけるはわれもねざりし夜もすがらの事なりしに
いねんとも寝にいられねど故に腹中もそふらへに
およびて羊の肉の焼きたるをもとめせん事なせ
おりひはうとおもひしかどたちまちにうけたまはり
りもれちちやくろうへなどさめうふおもりしめき
そんなおこさむおしくて我より始りなどや
仁宗おほせなろうはさる事なればこそ
あまねよみをひきうけいれ一たびさせなば
ぜしかも膳方のよのいくつ孫のかたへとおして



よふくだりしを見てかなしさこれみまろむ
為しもしさあらんのなしばそこぞく罪科いのちを
げいきん事海ことに違かう為しなんで
口賤なれぞことわりひまにしてあまる罪を
おろさん事ありしへたまれ我がやぶかりこれり
よりてのぞみをなむと御頼ろてうあれくりありあれ
又ある日此事なかりしあ内人をまぐりを二十枚
仁宗へもとめさそてまゐらする海のかを海ぐり一枚乃
其あたひ錢千文とまうし給ふに仁宗の給ひまうり八
我一度膳をすくむるに錢二万八千文をつ弁やせう
きし給ひうさするを乃あまり此錢をたち為を

さんるあれるりくさりうらしもよせんとてたまま
ぐりをもちゐくにおじきと思召うのさそてまゐりし
も海ぐりを制ろ為しまひろりそれに仁宗宣帝宋朝
総一乃仁君なそて海しします寺ゆへとのくうんひをるを
るを部にあそれ給ひそういちんやあまをあそれき
給ふ事申しをとろうなうとうや故よ天下太平なり
おさまりて国土をのびりう長久なり

夜止燒羊
宋仁宗

後苑観麦

宋乃仁宗皇帝ハ稼穡農人乃ことわざをいたはり
ましくてあまねく民らのうへを思しめしける
叡慮ありしめされ宮中後苑のうちに一所の
あき地のありけるに麦をうゑさせ人を遣ひてこれ
とらせ一所乃小殿をたてそれをなづけて宝岐殿といふ
まさこそて宝岐殿といふ名の事ハむぎ一くきに二所
いできたる穂あれば岐といふられ豊年乃さいはひの
ありしゆゑ宝とすべききざしなりとて宝岐の二字
をとりて清殿乃名とされへりまた後年むぎのはい
ちうみちに仁宗後苑にみゆきなされ宝岐殿に御

ましてむぎなどはけふをはじめて御覧なされてそれ
よりを御とゞまれ志んかふむかしは御作せられしを
宮殿乃まへに蔴麦乃たねをまかせうへもせで毎年むぎ
絵うゆる事なくに一州乃志さいありけれ御みに
文中におそ天下ハ多く百姓かうさく乃あめに力を
津くしあけられかんなんをぎろ事をもつるぞ故に文
中乃まへあむぎをうへて民乃かんなんを知る給ふむ
御作せられしこそまことにありがたけれ仁宗皇帝とさの
と天子乃御徳ありといへども猶しきあまれ乃道も
御心がけさせ給ひてむぎをうへ作せ給ふ事民
百姓乃くるしみを志ろしめさんがためなりや

軫念流民

宋の神宗皇帝とてみかど一人ましませりその時王安石とて一人の臣下ありけるがあらたにしんぱふをおこなひ毎ミ百姓をなやましてゐんしをゆるかになる事おほしあまつさへ熙寧七年のとし天下おほひでりしてでんゑんこと〴〵くかれ〳〵になりそのうへみな東方北方の毎ミ百姓みなくうへ入りれぞみはしおやえ子城をこく〴〵ゑはおやをたのしまずこきうのいのちしらずくみありてくるしうしこくへと流らうきくゆきたをまてそもてうなりあられなり安らありさ夜ともわきまろかりとうやこうり光州の

ちご護郎俠といふものゝ光刹をなちのにふくしやこゝろ
のだ波みちをうらしのより球免ようりもあらくむ
ふあんまうそてみかどへ使よしそうそんしよみの
うまいなとくりんとそかのなされありけるとらそ
まくなばうしるりしなりそのゑのなすかり大来の
樂をとりくさの孫をかりてうへなとしのぐとゝろする
ありきろうハしやうと鳳ふ里りくあれとを羅ふ人へ
もありけるひえさちまちうへまつてみちうりふ
みずへさなをかくさのもあり老人も杖をつきゆつとけ
るすれ者なぞんまをひきてあくうしらへやまよひたる
かうふびんのありさま海どものさらぞなづみうれ

まうしいうれしやこんへはかなりくうのなばなをうれ
敵みとへまくめくそまうり又そうさんしてやし
たゞありくさみいすてんうれまいとをむびしうまさ
まひてぞんさんゆうなうありなみしかなりゆへ
ふてんちれ氣をしこの及くにさうらひてあしら
けり事ひさし君をしゆめて禄をひたまりくまい
さいとなしゆくうをみつあだんさんをめぐまたまふ
たゞしとぞなりくいさめてそまつ有禄家この名づけ
けらんしてあとまこのあくきはし宮中しうり
いりせなきひてそのよもそうう海とろぞなりにと
さ屋さんかくやあノましとそしみの事をあんし

きゝ給ひ夜もすがらいねさせ給はで君よりのせんじ
中にも十八條のほうどもをなかばやめてゆるし給ひ
あるひはくとくへふれをまはしとりかはせられて
だんうんとのよろしけなまはりよろこぶ事かぎりなか
ごうりよしてたちまちに雨しくしくてあまねくふり
蝗虫雨露のめぐみをこうむりて五穀みのりちくさと
りやされも天下の君子まうりおとをまぐまう
あく民をあはれみ御まつりごと天地の神へ祈ん
ならしめ國ふしぎひかりかゝり

燭送伺局

宋乃神宗皇帝のとき蘇軾といひしけんじんありける
御門蘇軾が人のさいかんよわふてよろしからん
をとりたてゝかんざくへながされけるそのゝち神
宗のうぎよしたまひてよりそのゝち哲宗そくゐに
そなはり給ふおりのとき蘇軾をめしかへされて翰林
学士乃くわんとなる此時の哲宗のはゝせんじん太皇
太后政事ありて哲宗におしへ御そくいへと便殿に
おしはせる哲宗をおはしち蘇軾にせんじくださされて
はゝせんにんさんとみかせそら蘇軾御前
にまうけたまいりをかりいへ太皇太后のげん

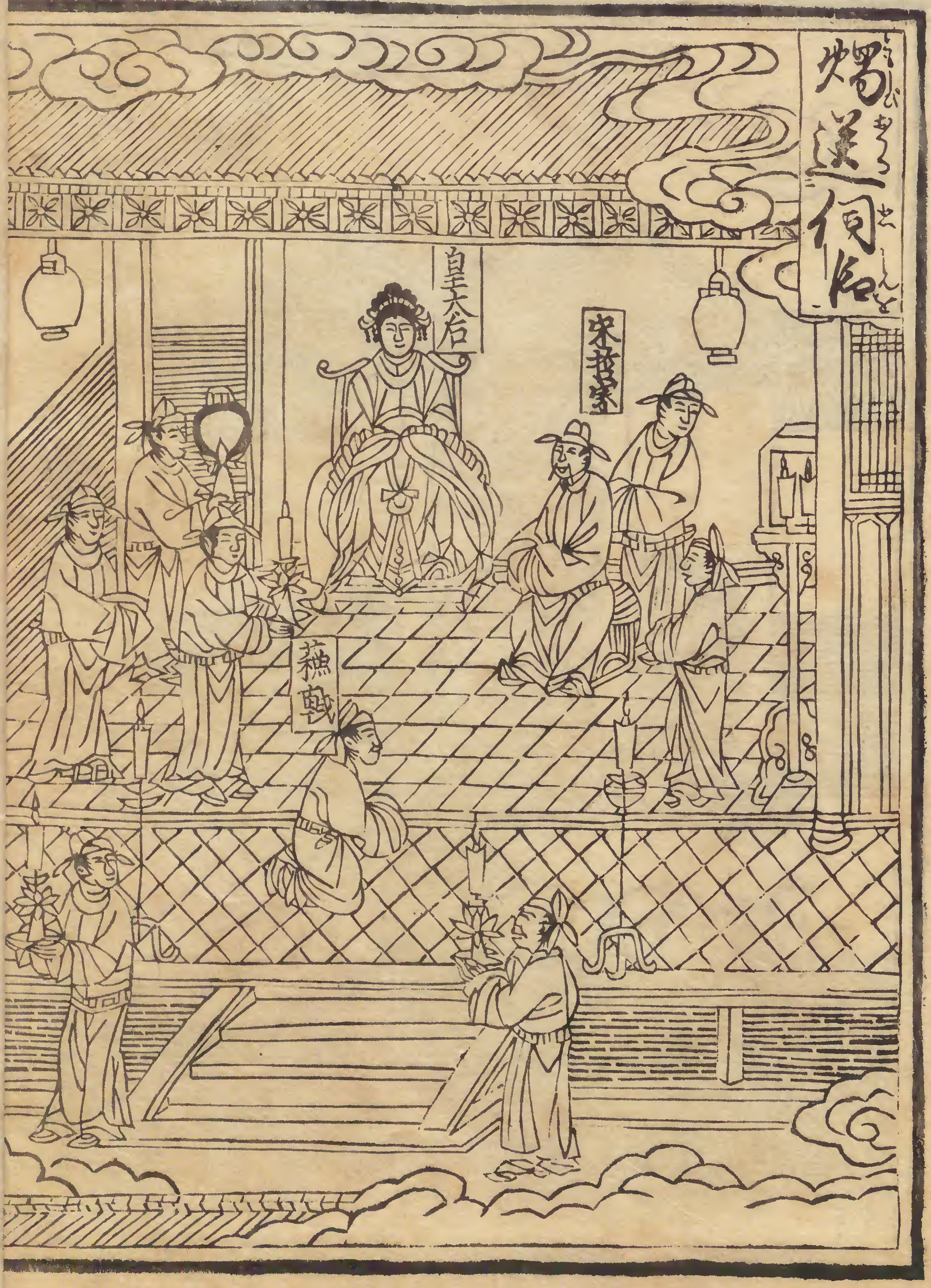
ざんを太后とらへさせ給ひあらためてみかへしけれバなん
其官(くわん)かはりありけるぞ蘇軾(そしよく)これをきゝて申されけれ
いまみかど乃おほせにゐのり翰林(かんりん)学士乃官(くわん)にめしま
かりありてもはべれどもあのまんぶくをさたさせ給ふ
みそかにいでさせ給ひおほかたあの官(くわん)よする
るまじきこれ我がおもひきおよばざりし御めん給へとぞ
申しけれバ太后のたまひてといふはことに翰林(かんりん)学士ハさき
のせんていありしあんしん一たびさかひとおぼ
されてありしかども文をのべかくこそありこの
せんふうあるを事をいつものゆへぞや仰せまいらす蘇軾
とかくにこれ君乃御おんありそれがしさいはひと

太后(たいこう)乃御そんじになりし文をみかど乃御あそばされし
ふより二たびまゐらせ給ひけるを見たまふるのゝ官(くわん)に
あげ給はず事うしみにくをみせまいらせどかさしめ
御しとかやたる太后(たいかう)の給ひたるハこれなんじを
とちおもひて御方もやくて御しまする神宗(しんそう)のかちお
もふとありけるをしそのゆへをとひぬれば神宗(しんそう)
くちおしは御しまさとゑなんじがはらし文章(ぶんしやう)を
よのきみよろこひてよのまくかんじおしくてよろこひ
給ふとかきりあるしきありといふをもそんめいふ
てうにしてはおほせとさう給ふ梅へなんじがうち
おほかたひまのしろうすとすなんじととち

其学士のせんに多き事も神宗乃ころは然れど
仏かんをろ禁へぞとおもひ給ふり蘇軾乃ようけ
多かりし神宗の御事を招りひかして妙かんを
なんだを御なげき遊はしなげて其後より太后も
哲宗も一度に多いつと御げう給ふ多分へただ右にちん
危うをれ共もうれかん海へ遊ながし居り又太后
ろうしをなくも清雅婆をも蘇軾をめされてはちや
仏そざされ給ひはりくてやう多く我もふけぬ事
む蘇軾も仏か多りし危りなりあのと見太后御世
久治みえさくめてみち乃ころかり御ん史をさそし
多蘇軾仏をく出とのさまひてともなきちは出へなる

こうみれもやく武いぞ久河多う遣う古参く志よへ
ぞ多るせらう太后乃は御かんれれどかるどしけるれ
ぞもなるくにやしそうり八御りはり

帝鑑圖説巻第八終



皇太后
宋哲宗
蘇軾

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan